

学の人・土橋寛博士を偲んで

廣川勝美（大学文学部教授）



土橋寛氏略歴

一九〇九年二月二日生まれ。
一九三二年京都大学文学部を卒業。奈良学芸大学教
授を経て、六二年同志社大学文学部教授として入社、
並びに大学院文学研究科教授に就任。七九年名誉教
授。
一九九八年六月一日永眠 八十九歳

草木の青やかに繁る季節が再び訪れた。いかさまに思ほしめせか、師の御霊が天翔り給うたあの日と同じく静かに雨が降っている。ここ数日、『古代歌謡論』をはじめとする御著書を繙いていく。

すでにして古代歌謡研究の第一人者であつた。時に一九六二年、大学院文学研究科国文学専攻の創設のために着任された。新町校舎臨光館の二階で最初の講義が行われた。西陽の照りつける古い建物に大部の原稿を読み上げる声がのどやかに響いた。国文学専攻の第一期大学院生三名が初めて直接に触れる、世に称する「土橋古代歌謡学」のプロローグであつた。それは京都大学より受けられた文学博士の学位請求論文で、後に刊行された『古代歌謡と儀礼の研究』である。

日本古典文学大系『古代歌謡集』、『古代歌謡全注釈』（古事記編・日本書紀編）

などの精緻な文献解釈の根底を支えるのは、ごく初期の重い録音機を担いで採集したといわれた民謡である。奄美諸島の島唄や中国の雲南地方の歌垣の調査などは古代歌謡論を貫く感性の根源である。

生涯をかけて見据えられたのは文字によらない口誦の歌謡であり、近代的な抒情歌とは別の古代的な呪術歌である。このような古代歌謡の研究を万葉集にまで広げたのが毎日出版文化賞を受けられた『万葉開眼』（上・下）である。

横溢する好奇心と卓越した洞察力をもつて健筆を揮われながら、酒席では手拍子をとったりつづつ楽しそうに歌われた。その多くは民謡であり演歌であつた。勧酒歌や謝酒歌など酒楽之歌を特に好まれた。

その御姿に接する機会に恵まれないままに御無音にうち過ぎたことが悔やまれてならない。わずかに米寿の祝宴にお出

ましいただくことを得ただけが慰めである。しかしながらそのような感傷は先生のものではない。同志社大学を御退職された後も、さらに御研究に打ち込まれたのである。それは「土橋寛論文集」（上中下）などとして結実する。

世事に関わられたのは一九七二年より第八期学術会議会員としてである。その間に御尽力されたことのひとつが国文学研究資料館の設置である。国文学に関する資料を収集整理し広く内外に提供することの重要性をいち早く提唱されたのである。次いで第九期学術会議会員の折は私学助成の立法化に関する学術会議の勧告を推進された。

余りにも偉大な師である。その喪失感を拭いようはない。もはや聲咳に接することは叶わぬ。耳に残る叱声をよすがに師の御跡を追うばかりである。

アレキサンダー・ポープと松ヶ崎

— 岩崎泰男先生を偲んで —

吉村宏一（大学言語文化教育研究センター教授）



岩崎泰男氏略歴

一九三三年三月一日生まれ。一九六〇年三月同志社大学大学院文学研究科を修了後、同志社商業高等学校教諭を経て六三年同志社大学商学部専任講師として入社。六六年助教授、七二年教授、九八年名誉教授。八六年には永年勤務者として表彰を受けられた。一九九八年十一月一日永眠。六十五歳。

岩崎先生が亡くなられたのは、昨年三月に退職されてから半年余り経った晩秋の頃でした。ご葬儀の時にお見えになった先輩の先生方がこももに岩崎先生の早すぎる死を残念がっておられました。確かに早すぎる死でした。そのためか今なお生きておられるような感じがして、

松ヶ崎のところをバスで通ると近くの路を犬を連れて散歩しておられる姿でも見えるのではないかと、車窓に視線を移すことが時々あります。それは単に私の個人的な先生への思いからではなく、もしかしたら今もお「地霊」として松ヶ崎におられるのではないかという気がしてなりません。といいますのは、先生は松ヶ崎生まれの松ヶ崎育ちで、それをご先祖が桓武天皇に従って京都に來られた一族の末裔だと聞いているからです。大文字の送り火の「妙法」の火床の一つをす

つと世話してこられ、八月十六日の暑い日中、薪を担いで山に登る話もされておられました。

先生は一九六〇年同志社大学文学研究科修士課程を修了後、同志社商高（今はありませんが）に勤務され、六三年に同志社大学商学部に着任されました。その後、英語科の科目主任や学部の教務主任、また大学評議員など責任ある仕事をこなされる一方、研究の面、とりわけ十七世紀から十八世紀のイギリスの文学と政治とのかわりについて精力的に仕事を進められ、一九八二年に『スウィフトの時代の政争と文学』が英宝社から出版されました。また翻訳も多く手がけられ、ポールの『髪を掠奪』（同志社大学出版部、一九七三）、J・アールバースノットの『ジョン・ブル物語』（アポロン社、一九七八）、ポールの『アールバースノット博士への手紙』

（英宝社、一九九〇）、デフォアの『十七世紀末の英国事情―デフォアの社会改善計画』（同志社大学出版部、一九九四）などがあります。一般にそれほど知られていない重要な文献を日本の読者に紹介された功績は実に大きいと思っています。もう少し長く生きておられれば、さらに貴重な仕事が増え重ねられたと思うと本当に残念です。でも先生のお仕事を読み返していると、語で鍛えられたあのよく通る声が聞こえてくるような気がしてきて、今も変わらずわれわれの心の中で先生は生きておられるのだという思いが強く感じられてくるように思われてなりません。合掌。

をさむ

下村福先生を偲ぶ

湯口誠一 (元高等学校教諭)



下村福氏略歴

一九二二年三月三〇日生まれ。一九四四年九月早稲田大学文学部を卒業後、四七年九月同志社中学校教諭として入社。四八年四月より同志社高等学校教諭、同志社中学校教諭を歴任。四十年間の永きにわたり同校の教育に尽力され七二年一月には永年勤務者として表彰を受けられた。
一九九九年二月五日永眠 七十六歳

下村先生は古希に当って「をさむ句集」をまとめられた。「この句集は五十余年間の作句の集積であり、それは取りもなおさず、私の分身と言わべきものである」とあとがきにある。昭和十四年以来、虚

子、年尾、汀子の選によったという一千七十余句は珠玉に満ちている。後輩である私が偏狭な視野で仰いだ先生像を語るよりも、その句集の中の幾つかを紹介する方が、亡き先生を正しく伝えることになるかと思う。とりあえず高校教壇の作品から触れてゆくことにする。

子等の瞳がゆ貧しき講義見上げつつ
留年といふこと父母はまだ知らず
卒業を送りて悔の多き身ぞ
汗拭きて生徒の心まだ読めず

教師の満たされるとき、空しく脱力するとき、折々の心情が滲み出ている。しかし、生来健康には恵まれなかった。

輸送車の冷たき廊を幾曲り
寒灯下手術を終へし五体なる

大手術のあとは、ずつとその体をひきずらねばならぬさだめであった。

食ひたくなく食はねばならず咳をする
己が生を見つめられた一方、御両親や奥様の死に直面して、死生の尊厳を重く受けとめておられる。

看取る我看取るる汝夜ぞ長き
足袋はかす足の先まで死化粧

ここには奥様との永訣の作のみ拾った。痛恨哀惜にこれ以上の言葉はない、と読む者に訴える文字が並ぶ。

昭和五十九年夏、先生は再婚された。新しい奥様は篤いカトリックであられる。

妻うなづき夫うなづき冬籠

六十二年春定年、後二年は講師、六十四年春からはそれこそ第二の人生を存分

に享受謳歌されるおつもりだったろう。そこへ十一月初頭、脳出血が先生を襲った。入院院がくり返され、徐々に会話の力を取り戻し、リハビリにも懸命の努力をされた。たち直られたあとの御自宅での句会は最も充実した時間であっただろう。奥様も必死の介護の歳月であった。

しかし衰弱を止めること叶わず、平成十一年二月五日昼、最後の息を引きとられた。晩年、洗礼を受けられたが、それは奥様の足かけ十五年に及ぶ献身へのお答えであったと拝察する。繊細で、温厚で、不屈高邁で、感激家で、情厚い風流人であった。下村福先生は昇天されたが、その声は軽い咳きばらんと共にありありと今も聞こえてくる気がする。

「同志社」 創立の頃の香り

山口良子（中学校教諭）



平岡澄江氏略歴

一九〇六年二月五日生まれ。一九二七年同志社女学校専門学部英文科を卒業後、京都市立堀川高等女学校教諭を経て、一九四七年同志社中学校教諭として入社。一九七一年二月に退職されるまで、同校の教育に尽力された。
一九九九年四月九日永眠 九十二歳

三十年ほど前の春、ジョン・M・ラッシェ先生が一時帰国される時の講師として、私は同志社中学校を訪れ、平岡先生にはじめてお会いしました。当時、英語科と宗教部は同じ部屋にあり、本来同志社が始まった頃のクリスチャンの方々のもつ雰囲気、その部屋に満ちているように思われました。

その中でも平岡先生のクリスチャンとしての存在は際立っていました。髪を美しく束ね、おだやかなものごし、柔らかなまなざしの方でした。平岡先生の訃報に接したとき、私の頭の中に浮かんだのは、「生徒たちが最後の授業でこんなすてきなことをしてくれて……」と花束を抱えて涙ぐんでおられた姿でした。

一九六八年に講師となり、七一年に専任となつてから数年間に平岡先生には多くのことを教えていただきました。

アリス・グイン先生とのコンビで長い間、同志社中学校の英語教育を支えてこられたこと、「発音記号」の冊子を独自にまとめて生徒にわかりやすく教えておられたこと、いつも生徒の答案をていねいに採点しておられたこと、即席のスピーチをされるとき、わかりやすく、すつと人の心に入っていく話し方をされたことなどを思い出します。

平岡先生と同年代の久永先生が、あるとき真剣な表情でこう言われました。「ぼくは平岡先生がうらやましくて仕方ないんですよ。だって教え子が平岡先生に自分の子どもを教えてほしいから同志社中学に入れた、と言ってるんですよ。うらやましいなあ」。

私が出産のため産休に入る前に、平岡先生に「どのようにして育児をしながら仕事を続けてこられたのですか。とても

大変だろうと心配で」と相談したとき、「神さまは必要なとき、その人にふさわしい力を与えて下さる」とサラリと言われ、平岡先生の頃には出産の前の日まで教壇に立つておられたこと、少しづつ女性も仕事が続けやすくなっていることなど話して下さったのです。

第二次大戦後、同志社中学校が男女共学の中学校として再出発するときに、平岡先生は招かれて来られたとおききしています。それ以来二十数年、同志社中学校でクリスチャンとしての使命をもって新しい時代の英語教育に果たされた役割、また女性が働き続けることが難しい時代に仕事を続け私たちを励まして下さったことの意味は大きかったとあらためて思います。

ご冥福をお祈りいたします。

男同志の相合傘で

吉村博次先生を偲んで

山本雅昭（大学言語文化教育研究センター教授）



吉村博次氏略歴

一九一九年一〇月二八日生まれ。一九四四年九月東京帝国大学文学部を卒業後、総理府官房審議室研究員、順天堂大学教授等を経て六九年四月同志社大学経済学部教授として入社。八五年定年退職。
一九九九年四月一日永眠 七十九歳

酒場で貸してくれた一本の傘を両側から抱きかかえるようにしてぼくらは四条大橋を東に向かって渡っていた。先生の足許がいつになく覚束ない。いや、当方の足許だってどうだったか。男〇同志の〇〇相合傘でエ、と鼻歌まで出ていたから二人ともに甚だご機嫌だったに違いない。そんな風に二人は互いに凭れ合い連れ合ってゆらゆらと祇園町へと入っていった。記憶はここでぷつぷつ切れる。前に何もなく、あとにも何も無い。あるのはただ雨の夜の四条大橋と相合傘だけである。想いを凝らせばあれこれ前後を想い出せそうな気がしなくもないが、しかしそれはこのさいやめておこう。最期のお別れにふと蘇ってきた二十年余の昔の想い出の一齣は、それだけでもう充分なような気がする。

先生はシュトルム、リルケ、トラーク

ルといったドイツ近・現代の抒情詩と、ニーチェ、キルケゴールを中心にした哲学・思想史の研究を専らにするかたわら、自ら盛んに詩作を試みられた。いやかたわらではない。むしろ詩人がドイツ文学の研究を志したのだと言わねばなるまい。研ぎ澄まされた言語感覚はさながら外科医のメスの如くに狂いなくまっすぐ作品の急所をついた。その鋭い剣尖は屢々ぼくらの日常をも刺し貫いた。あるとき同人誌の合評会の席上で先生は一人の同人の頓珍漢な無理解ふりと、何よりも彼の研究者としての謙虚さの欠如とを激しく論難された。余りの舌鋒の鋭さに彼は会半ばで席を立ち、そのままいつに同人をやめてしまった。またべつのあるとき——旧第二外国語研究室の紀要に同僚の一人が翻訳を出した。他の同僚たちの前も憚らず先生は当人に面と向かつて

その日本語の拙劣さを痛烈に批判された。片言隻語を捉えての舌端火を吐くが如ききこおろしだった。文学の研究者を自ら任ずる者にとってこれは致命的な打撃である。先生は、時に恐ろしい方であった。

酒を愛し、友を愛し、家族を愛し、音楽を愛し、薔薇を愛し、詩を愛し、あらゆるものを慈しまれた先生ではあったが、しかしぼくはひそかに思ってもいるのである。向い合った相手との距離を一瞬のうちに見切り、つねに相手との間に相応の間を取って、相手をけつしてその間の中へ踏みこませない——先生はそうした、どこかでいつも見切る人ではなかったか、と。

とまれ、ぼくは先生から人生の楽しさをたくさん、そしてつらさを少し、教えていただいたと思う。合掌。

坂本武人先生を偲んで

岩谷幸春（女子大学生活科学部教授）



坂本武人氏略歴

一九五八年三月同志社大学大学院経済学研究科修士後、同志社女子大学職員を経て六二年四月同志社女子大学助手、六四年専任講師、六八年助教授、七四年教授、九六年名誉教授。九二年四月から九四年三月まで家政学部長をうとめられた。八七年八月から九〇年八月までの間、学校法人同志社理事・評議員として学校運営のため尽力された。一九九九年四月二日永眠。六十八歳

坂本武人先生は、一九九九年四月二日、急性心筋梗塞のため、六十八歳という若さで惜しくも急逝されました。

坂本先生は、三十五年の永きにわたって同志社女子大学に奉職され、一九九六年に定年退職された。同志社女子大学からは名誉教授の称号を授与された。一九九六年に京都ノートルダム女子大学文学部教授に就任、九九年には副学長に就任されて、これからという時であった。

持病の心臓病を抱えながらも、「人々が真に幸福で愛に満ちた生活を実現するために幾分なりとも寄与したい」という熱意の下に、教育と研究の両立に留まらず、社会活動との三者併立を目指して、相当無理をしながら超多忙な毎日を送られていた。このような先生の真摯で情熱的な生き方は、言うまでもなく、キリスト教精神に根差したものだといえよう。

教育においては、家庭経済学、消費経済学、生活設計論、消費者教育論など多数の講義を担当されるとともに、家庭経済学ゼミを担当されて五百人近くの卒業生を世に送り出され、卒業生は各方面で活躍している。伝統的な家政学部家政学科から総合実践科学的な二コース制の生活科学部人間生活学科への改革・発展には主導的な役割を果たされ、生活科学教育の充実・発展に多大に貢献された。

研究においては、(1)大衆消費社会や成熟社会における生活構造・生活意識の変化や生活および消費行動の分析、(2)消費者問題の分析と消費者政策（行政）の課題の解明、(3)望ましい社会生活の創出とその方策の解明を精力的に行い、多大な研究成果を上げられ、独創的な新しい家庭経済学を確立された。

坂本先生は、家政学（生活科学）、家庭

経済学を、「幸福実現のための学問であり、愛の完成をはかるための科学である」と概念づけられ、「幸福とは私たち一人一人が人間として与えられている特性を高め、活かすこと（自己実現）であり、愛とはその幸福を他者と共有する行為である」と主張された。

社会活動においては、京都市消費者保護審議会委員・会長兼任、京都府消費者保護審議会委員・部会長兼任など、十指に余る数々の委員を併任・歴任され、京都府および京都市の消費者行政の充実・発展に多大に貢献された。そのため、経済企画庁長官より消費者行政功労賞を授与された。また新聞の家計簿診断コーナーなどで、市民にたいへん親しまれた。末筆になりましたが、先生のご業績に對し心から感謝申し上げますとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。